

対話からうまれる若者たちの居場所と自分らしい将来のあり方

研究代表者 浜松医科大学医学部看護学科 准教授 山本 真実
Yamamoto Mami

研究の要旨

本研究は、若者が自主性を発揮して継続している居場所を取り上げ、参加者によってつくられていく居場所の特性と、その居場所で若者たちが見つける多様性の尊重や自分らしい将来への考え方を、「対話」という視点から探求したものである。データは、半構成的インタビュー、対話のセッション、参与観察により収集し、質的帰納的に分析した。自主的・継続的な居場所の特性として、全員で楽しむことを重視している、相手の話を聴く・関心を寄せようと心がける姿勢がある、多様な参加目的を許容できる柔軟な運営スタイルがある、日常から独立していて気心知れた人間関係があるなどがあり、参加者それぞれにとっての参加のメリット（生活のメリハリになる、エネルギーをもらえる・気分が軽くなる、関心や考え方を広げる機会、コミュニケーションを広げる機会など）があることが明らかとなった。この居場所は、ナラティブ・コミュニティの特性を持ち、対話のなかに新しい物語、多様な考え方が生まれることによって持続し、参加者は“サバイバルを生き抜く”という共通の物語に支えられながら、自分らしい将来のあり方を見つけていくことが示唆された。

1. 緒言

Society5.0 時代の到来、Covid-19 感染症の世界的な拡大など、社会の在り方や人々の価値観が急激に変化する時代となった。こうした時代において、次世代を担う若者には、多様な価値観を尊重しながら、自分らしい生き方を見つけていくことが求められる。若者にとって、同世代の仲間と集い語り合うことができる居場所は非常に重要であり、対話は、自分と異なる考え方に出会い、自分自身について考える機会となる。しかし、卒業や就職といった生活の変化、仲間を見つける難しさ、コミュニケーションへの苦手意識、ネット上でのマナーの難しさなどにより、集い語り合う居場所を得にくいこともある。また思春期や青年期の人々は、自分らしさを見つけて自立していく年代にあり、設定された場に呼ばれて集まる、という居場所のあり方ではなく、参加者の力で居場所がつくられ、自主的で継続的な活動となることが望ましい。

本研究では、参加者の自主性により継続している若者のグループ活動（以下、同好会とする）を取り上げ、参加者自らによってつくられていく居場所の特性と、その居場所で参加者が見つける多様性の尊重と自分らしい将来への考え方について、「対話」という視点から探求する。

2. 国内文献レビュー

本研究に取り組む準備として、地域における若者グループ活動を外観するために、国内文献のレビューを行った。

医学中央雑誌 Web 版を用い、発行期間を 2014 年～2023 年、キーワードを、若者 and 地域、若

者 and 居場所、若者 and グループ、若者 and グループ活動、若者 and 余暇とし、会議録を除いて文献を検索した。そこから若者グループや集団活動を取り上げていない文献、重複文献を除外し、30 文献を分析の対象文献として選定した（図 1）。対象文献は、発行年度、若者グループの対象者、若者グループ支援の工夫に注目し、類似点と相違点により分類した。

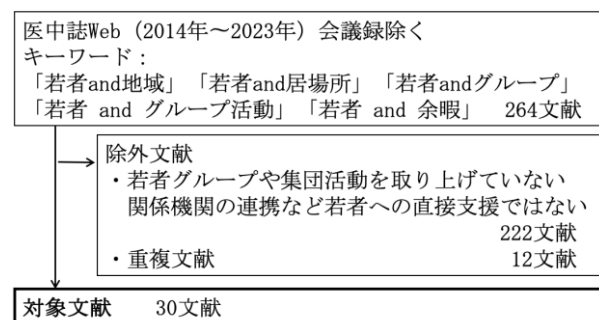


図 1 対象文献の抽出手順

分析の結果、対象文献が取り上げたグループ活動の参加者は、ひきこもりの状態にある若者（9 文献）、孤立・孤独を抱える若者（2 文献）、心のケアが必要な若者（4 文献）、生きづらさ・困難さを抱える若者（7 文献）、障がいのある若者（4 文献）、ピアリーダー（1 文献）、ヤングケアラー（3 文献）であった（表 1）。年別に見ると、2014 年はひきこもりの状態にある若者に注目した報告が大半であり、2015 年以降は孤立・孤独を抱える若者を取り上げた文献が、2016 年以降は心のケアが必要な若者、生きづらさ・困難さを抱える若者、障がいのある若者を取り上げた文献が散見さ

れ、2022 年以降はヤングケアラーが取り上げられていた。若者グループ活動は、ひきこもり支援から様々な健康課題の支援へと、時代と共に活動内容が広がっていた。

若者グループ支援の工夫として、物理的なアクセスしやすさ、若者が親しみやすいデザイン、あるがまま受け入れて聴く、個人のニーズに合わせる、ボーダレスなグループづくり、安心できる場づくり、当事者主導のプログラムづくり、多職種協働、家族支援が報告されていた。また参加者の条件を緩やかにし、ボーダレスなグループを意識した活動や、集団の場でありながら個人のニーズに合わせる重要性も提案されていた。

(第 12 回日本公衆衛生看護学会学術集会@北九州市、ポスター発表、2024 年 1 月)

表 1 若者グループ活動の対象者と文献数

カテゴリー	若者集団の特性	文献数
ひきこもり (ニート・無業者) の状態にある若者	ひきこもり (ニート・無業者)	9
孤立・孤独を抱える若者	孤立・孤独を抱える若者	1
	社会とのつながりを持ちにくい若者	1
心のケアが必要な若者	心のケアが必要な若者	4
	生きづらさを抱える若者	2
生きづらさ・困難さを抱える若者	様々な (多様な) 困難を抱える若者	2
	コミュニケーションに課題を持つ子どもたち	1
	特別なニーズのある若者	1
	LGBT	1
障がいのある若者	自閉症ある若者	1
	統合失調症を持つ若者	1
	高次脳機能障害をもつ人	1
	障がいのある若者	1
ピアリーダー	ピアリーダー	1
ヤングケアラー	ヤングケアラー	3
合計		30

3. 研究目的

本研究の目的は以下の 3 点である。

- ① 自主的・継続的な活動である同好会は、参加者にとって、どのような居場所となっているのかを明らかにすること。
- ② 同好会という居場所で、参加者はどのような経験をしているかを明らかにすること。
- ③ 同好会を経て、参加者が自分自身や将来について、どのような考え方を見つけるのかを明らかにすること。

4. 理論的背景

本研究は、“現実とは、人と人との関係し合い社会的につくられるもの (Hoffman, 1992)” と考える社会構成主義に依拠する。本研究において「対話」とは、意味を見出し理解しようとする努力 (Anderson, Goolishian, 野村, 2013) であり、単なることばのやりとりだけではなく、相手に向ける

姿勢や、やりとりに生じる意味・関係性までを含むものとする。

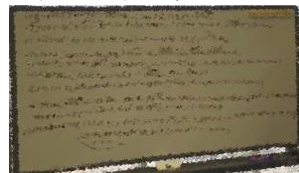
5. 研究方法

5.1 同好会の紹介

同好会は、2017年3月から現在まで続く活動であり、月1回、日曜日の午後 (13時～17時)、公共の貸会議室にて開催している。開始当初はグループの名前はなく、サークル、集まり、会など様々な名前と呼ばれていたが、“何かしら好きなことをする会”という特徴から同好会と呼ぶことになった。参加者は、10代後半～20代の若者であり、参加したい者であれば誰でも参加が可能であるが、参加にあたってはメンバーの了解を得ることになっている。同好会は、私が以前の研究で出会った3名 (幼児期に療育教室に参加した経験のある者) に声をかけて集まることから始まり、その後、療育教室への参加経験の有無に関わらず参加者が増え、2025年2月現在、9名 (参加者8名と私) で実施している。同好会において私は、研究者ではなく、メンバーの一人として参加している。

私は、これまで「対話」「ナラティブ」をテーマに研究活動を行ってきた。対話が続くこと、対話の継続性に注目することで、これまでとは異なるグループ活動のあり方を模索できるのではないかと考え、この会を始めた。同好会の目的は「対話が続くこと」、それだけである。活動内容は、近況や関心事を話題とした話し合い、そして余暇活動を通じたおしゃべりで構成されている。近況や関心ごとを話題とした話し合いでは、メンバーが車座になり、そのとき話したいことを話す。話す人もいれば、話さない人もいる。話をするにあたりホワイトボード、映画のパムフレットなどを用いる場合もあり、そうした方法は、自然と各々が行うようになった。余暇活動を通じたおしゃべりは、メンバーが活動内容を決め、必要物品を持ち寄るという運営が定着している。

同好会ではメンバーが考案したイベントも行っている。「推し紹介」はその一つで、1人20分程度で自分の好きな物を他者に紹介する。このイベントは、好きなことを紹介できる楽しさだけではなく、相手の関心事やその魅力を聴くことで、相手を理解したり、自分の趣味を広げたり、同好会以外の場での交流に役立つといった利点もあり好評である。方法は自由であり、20分の中で魅力を伝えようと、それぞれが創意工夫をしている。



近況を伝えるホワイトボード



第1回「推し紹介」の様子

5.2 研究参加者の紹介

研究参加者は、研究費助成期間に同好会メンバーであった 8 名である。研究参加時の年齢は、16 歳～24 歳、同好会参加時の年齢は 15 歳～19 歳であった（表 2）。メンバーの同好会参加中の生活の変化として、就職・転職、進学、仕事における業務負担の変化、障害者手帳の取得、関心のある活動の変化と狭隘化、他者との交流や外出の機会の減少などがあった。

表 2 研究参加者の概要

	研究参加時の年齢	同好会参加時の年齢
Aさん	23歳	17歳
Bさん	24歳	18歳
Cさん	20歳	16歳
Dさん	24歳	18歳
Eさん	23歳	18歳
Fさん	19歳	16歳
Gさん	16歳	15歳
Hさん	19歳	19歳

5.3 データの収集方法

(1)半構成的インタビュー

半構成的インタビューは、2024 年 2 月～4 月、公共の貸会議室にて個別に実施した。インタビュー参加者は 7 名（インタビュー時に同好会メンバーであった者）であり、インタビュー時の年齢は 17 歳～25 歳、インタビュー時間は 21 分～85 分、平均 50 分であった。インタビューにおいては、無知の姿勢（Anderson & Goolishian, 1992）を心がけ、話の流れを止めないように配慮した。インタビュー内容は、背景（年齢、同好会への参加時期、参加時の年齢、現在の所属など）、同好会はあなたにとってどんな機会や場所ですか？同好会に参加するときに大切にしていることはどのようなことですか？同好会での他者とのやりとりをあなたはどのように感じ、どのようなことを考えますか？あなた自身や将来についてどのように考えていますか？その他、同好会について思うことはありますか？とした。インタビューは、了解を得て IC レコーダーに録音し逐語化した。

(2)対話のセッション

毎回の同好会にて、その日参加したメンバーで、以下の内容を話題とした話し合いを行なった。話題は、近況紹介、同好会について思うこと（なぜ同好会は続いているのか、今後、同好会にどのように参加していきたいか、同好会をどういう機会にしていきたいか、など）、自分自身や将来について思うこと、その他、その時に話したいこと、とした。対話のセッションは、了解を得て IC レコーダーに録音した。

(3)参与観察

a. フィールドノーツの作成

半構成的インタビューや毎回の同好会後、フィールドノーツ(Roper & Shapira, 2000)を作成した。半構成的インタビューの様子、同好会の活動内容や雰囲気、参加者の言動、対話のセッションの様子を記載し、加えて、データ収集における私の気づきも記載した。フィールドノーツの作成では、直後に印象をメモすること、観察の記載と解釈を区別すること、進行中の調査プロセスを反省し記録すること、フィールドワークにおける問題や課題を記述することに留意した。

b. ホワイトボードの内容

毎回の同好会で使用したホワイトボードの内容（近況紹介、対話のセッションの内容、次回の予定など）は、写真に撮って保存した。

c. LINE の内容

同好会参加者のグループ LINE の内容は、LINE アプリケーション上に保存した。

5.4 データの分析方法

半構成的インタビューのデータは、カテゴリを生成するコーディングによる分析（Gray & Grove, 2021）と、個々の経験を詳細に記述する事例での分析（佐藤, 2008）を行った。コーディングによる分析では、逐語録を読み返し、同好会がどのような居場所・機会であるか、同好会にはどのような特性があるのかを分析の視点とし、類似性と相違性を比較しながら、語りの意味内容によってカテゴリを生成した。事例の分析では、インタビュー項目に基づき、個々の語りをマトリックス表にまとめて全体を概観した後、語りの意味を損なわないように、話題ごとに並べ直した。そして、同好会はどのような機会・場所か、参加するときに大切にしていること、将来に関する出来事の視点で語りを整理し記述した。

対話のセッションのデータは、登場人物、設定、プロット（物語の筋や構想）、対立、解決策を探ることができるナラティブ分析（Gray & Grove, 2021）を用いた。交わされることば、話題や意味の変化とその多様性に注目した。

参与観察のデータ（フィールドノーツ、ホワイトボードの内容、LINE の内容）は、活動日の順に整理し、半構成的インタビューと対話のセッションの解釈、同好会の活動内容の把握に用いた。

分析の厳密性（rigor）のため半構成的インタビューの分析結果、対話のセッションの分析について、研究参加者に伝え、違和感の有無を尋ねた。

5.5 倫理的配慮

研究の目的、方法、研究参加や研究中断の自由、匿名化の方法とプライバシー保護の方法、研究参

加による利益と不利益について、書面を用いて口頭で説明し、同意書への署名により研究参加への同意を得た。所属大学研究倫理委員会の承認を受けて実施した（No.22-187）。

6. 結果

以下に、研究目的①の結果（6-1）、研究目的②③の結果（6-2）を示す。

6.1 メンバーにとって同好会はどのような居場所であるか？

(1)参加者が語る同好会の特性 （半構成的インタビューより）

インタビューのデータを分析し、自主的・主体的である同好会が参加者にとってどのような居場所であるかを明らかにした。

同好会の特性として、全員で楽しむことを重視する、相手の話を聴く・関心を寄せようと心がける、多様な参加目的を許容できる柔軟な運営スタイルがある、日常から独立していて気心知れた人間関係がある、費用負担がない、自分の意思で参加する、行きたいと思うときに自由に参加する、日課として定着している、というカテゴリーが生成された（表3）。また同好会は参加者それぞれにとって参加するメリットがあるという特性があった。参加するメリットとして、生活のメリハリ・外出のきっかけになる、エネルギーをもらえる・気分が軽くなる、関心や考え方を広げる機会になる、コミュニケーションを広げるきっかけになる、相談し経験を踏まえたアドバイスを得られる、普段会えない人に会える・居住地域での縁が続く、というカテゴリーが生成された（表3）。

表3 同好会はどのような居場所であるか？

カテゴリー一覧
全員で楽しむことを重視する
相手の話を聴く・関心を寄せようと心掛ける
多様な参加目的を許容できる柔軟な運営スタイルがある
日常から独立していて気心知れた人間関係がある
費用負担がない
自分の意思で参加する
行きたいと思う時に自由に参加する
日課としての定着している
参加するメリット
生活のメリハリ・外出のきっかけになる／エネルギーをもらえる・気分が軽くなる／関心や考え方を広げる機会になる／コミュニケーションを広げるきっかけになる／相談し、経験を踏まえたアドバイスが得られる／普段会えない人に会え、居住地域での縁が続く

若者自身が自主的につくる居場所である同好会には、楽しみが共有できる、メンバーが対話を続けるための姿勢（相手の話を聴く・関心を寄せる心掛け）を持ち合わせている、日常から独立し

た人間関係がある、そして参加者それぞれの多様な参加目的を受け入れる柔軟さがあるという特性があった。

（第 83 回日本公衆衛生学会総会@札幌市、ポスター発表、2024 年 10 月）

(2)参加者が抱く同好会の将来像と葛藤 （対話のセッションより）

前述した特性に加え、葛藤が伴う点も同好会の特性であった。以下に、対話のセッションのうち、参加者が抱く同好会の将来像と運営における葛藤が明らかとなったセッションを紹介する。この対話のセッションは 2024 年 4 月のものである。

この頃同好会は、メンバーの増加により活動内容や雰囲気が変化してきていた。こうした変化は、長く参加するメンバーにとって、ことばにはされないものの、腑に落ちないモヤモヤ、気になることとして、心に引っかかっていた。私も同好会の変化を感じており、今後、同好会をどのようにしていくと良いのかと考えることが多くなった。そこで、同好会に関する心配事と未来のあり方を語り合うために、“未来語りの対話（Anticipation Dialogue: AD）”とその後の意見交流を行った。この対話のセッションの参加者は、同好会の初期から参加している 4 名（A さん、B さん、D さん、E さん）と山本であり、AD は 52 分、その後の意見交流は 63 分、合計 114 分であった。

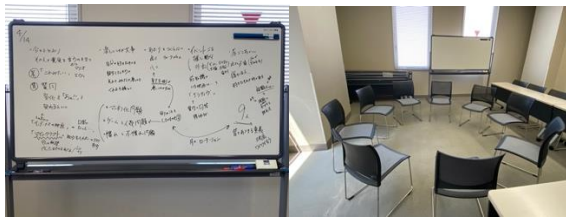
AD とは、フィンランドで開発された対話的アプローチである（Seikkula, & Arnkil, 2006）。AD では、心配事（Worry）を抱える人が対話を主催し、その心配事に関係する人々を対話の参加者として招く。心配事を抱える人々は、心配事が解決した未来（約 1 年後）から、その心配事が解決したプロセスを話し合い、心配事への対処法へとつなげる。1) 参加者が未来に行って（行ったつもりではなく本当に未来にいるという意識で）、心配事が解決しすべてがうまくいった今を語る、2) すべてがうまくいったプロセスを振り返る、3) 参加者は現在に戻ってきて、先ほど語ったプロセスから、今後に向けた具体的な計画を立てる、という流れで対話が進む。

AD では、「今後、同好会をどういう機会にしていきたいか」という話題を話し合った。同好会の将来像として、これまで通り、みんなで協力して一つのことを楽しむ機会にしたい、という考えが語られた。そして対話を進める中で、参加者が増えても今の活動や雰囲気を維持できるのかという心配事が共有された。AD 後の意見交流では、心配事の根底にある葛藤がことばにされた。この葛藤は、「みんなで一緒に楽しむこと」と、「それぞれにとって意味のある活動であること」という、両立が難しい 2 つの価値観のはざまに生じるも

のであった。2つの価値観をどう両立させるかを話し合うことで、“どちらを優先するかはその都度変えていけば良い”という柔軟な姿勢が新しい考え方として生まれ、共有されていった。

対話セッションは、同好会の過去のスタイルを大切にしつつも、それに捉われすぎず変化の余地を残す、という柔軟な姿勢をメンバーが確認し合うプロセスであったと考える。

(15th International Nursing Conference & 28th East Asian Forum of Nursing Scholars@Seoul, Poster session. 2025 年 2 月)



対話の内容を記載した
ホワイトボード

対話のセッション時の
車座の様子

(3)メンバーが語る同好会が続く理由と同好会の今後（半構成的インタビューより）

以下に、メンバーの語りから同好会の特性に関する語りを記す。

a. A さんの場合

—同好会はなぜ続いていると思う？

分からないです。何でだろう。それこそ楽しいからじゃないですか。だって、飽きてきたなってみんなが思い始めたら、もう解散じゃないですか。

—今後、同好会をどうしていく？

集まる以上、楽しくしたいなみたいな、楽しい会にしたいなっていうのは若干考えてるかもしれないです。

b. B さんの場合

—同好会はなぜ続いていると思う？

個々の趣味をやり続けた結果じゃないです？大体、ゲーム好きです。趣味ゲームです。趣味映像みる人もいます。趣味を定期的に続けてきた結果ではある。

—今後、同好会をどうしていく？

ここでやれることの幅を広げられるといいなとは思っています。人数も多いんで、人数相応のやつができればいいなと思っているんですけど。持ってきたボドゲー、メンバーに刺さる時も刺さらない時もあるんで、人数相応のゲームを増やせるかは何とも言えないですけど。

グループを2つに分けたら、1対1で会話したい人がいて、その聞き手がグループに一人ずつ必要で。もしグループを分けて、人が足りなくて、追加で日曜日開けてくださいってことだったら、俺、マジで

開けるんで。

c. E さんの場合

—同好会はなぜ続いていると思う？

みんながやめたいって思っていないから会は続くのかな。やめたい理由はないですし、多分今後ともそれ見つからないと思います。

同好会のような会を作るなら、自分の好きな人、しゃべってもいい人を3人でも2人でもいいから集めて、そこから君の知り合いに興味ある人いない？って広めてくしかないんじゃないですか、結局のところ。僕らまさにそうじゃないっすか。行ってみようかなって、行って興味そそられるんだったら、その人来ればいいし。目的がないっていうのがすごい売りじゃないですか。で、会費を取ってない。これも素晴らしいことじゃないっすか。これメリットしかないんで。話しやすい、フレンドリーな人がいればいいっす。雰囲気として。

—今後、同好会をどうしていく？

どんどん多分人数が増えれば増えるほど、全員のやりたいことは叶いにくくなるんで。今後人数が増えるにしても、このまま維持するにしても、どちらにしろ、確実に辛くなったら逃げてく人が出てくるとは思うので。その辺は何とかして改善しないと、会は続いていけないので。

初期メンバーがつくったこの話し合いをしてから何かやるっていう流れ、この軸はあったほうがいいんじゃないかなって僕は思ってます。この軸を消しちゃうと、多分この会じゃなくなっちゃう。この会がなくなっちゃう。マジで。これは消さないほうがいい。これは初期メンバーが培ってきた軸ですから。

6.2 同好会での対話におけるメンバーの経験と自分自身や将来への考え方

以下に、同好会での対話における経験と自分自身や将来への考え方についての一人一人の経験を記す。その後、対話の中で自分自身や将来への考え方が創られていく様子として、就活サバイバルの対話を記す。

(1)一人一人の経験（半構成的インタビューより）

a. A さんの場合

—同好会はあなたにとってどんな機会や場所？

頻繁には会わない人たちと楽しく趣味の話とかで近況とかを話せるいい機会かな。他と一番違うのは、年上で、なおかつ自分たちと話が合う人がいるってところかな。年上でも年下でもいい。年齢が違ってある程度話が合うってなると、物の見方もちょっと違うんで、「そういう考えもあるのか」みたいな。

割と各自の自主性によってやっていますよね。スケジュールをわざわざ作ったりとかはしないし。

何時になったら映画見ようかみたいなことはあるかもしれないけど、割とずるずる長引いたりしたりするし。

完全に独立してた集まり。例えば、友達の関係とか、会社の集まりとかでもなくて。完全に。だって、ここはここじゃないですか。完全にここだけで独立した集まりっていうか。

一同好会に参加するとき大切にしていることは？

あんまこの同好会だからって気にしてることはないかもしれないです。普段どおりというか。自分の世界があるのかなと思う人には、あんまりぐいぐい行かないようにはしてるかな。

他のメンバーの話を聴いていて、昔の自分みたいなところがあるかもしれないなと。自分も周りも見えてないみたいな感じはあったかも。昔、俺、あんな感じでしたよ。それがあったから、今はだいぶ慎重な性格になってるかな。「気をつけろよ」みたいな。「俺はこんなふうだったぞ」って思ってアドバイスしてる。

一将来に関する出来事

どっちかという俺が相談にのってもらうことが多いですね。みんなしっかりした人なんで、ためになるというか。ここなら、就職のこととか、悩みのこととか相談しやすいっていうことはあります。距離感的にはだいぶ近いわけじゃないですか。でも逆に頻繁に会わないっていうことで程良い距離感もあって。なおかつ、しっかりした人が多いから、相談しても収穫のある返事が返ってくるというか。いつも会ってると、気軽すぎて、逆に「ここで重い話するのモナ」っていうのはある。家族だと深刻な話になっちゃうし、かといってハローワークとか支援してくれるとこだと、いまいち本音で話せないというか。あんま弱音っぽいことも言いづらいじゃないですか。どこまで親身になってくれるか分からないしってな感じで。一応、障がいを持った人専門の就活サイトみたいのに登録してみたんですけど。内容的には、もっとやりたいことはあるって感じです。ほんとにデスクワークというか、パソコンを触ったりとか。とは思うんだけど、そういう系の資格は持っていないし。

最近、そういう自分の能力のこととか考えると、ちょっとネガティブになるんです。結局、自分がちょっと得意なことはあって、そこは健常者と同じような能力持っても、他の部分は俺よりできる人はいっぱいいるし、みたいなことを考えると、ほんとに雇ってくれる場所なんてあるのかなって。結局、こういう仕事がしたいっていうても、俺よりすごいやつをどうせ探っていくんでしょ？って思うと消極的になっちゃって。就労移行支援みたいなことも考えてるんですけど。

同好会で就活のこととか話すと、その場その場では結構救われた感じはあります。気持ち的に楽になる、今度やる時はこうやってみようみたいな。

b. Bさんの場合

一同好会はあなたにとってどんな機会や場所？

飲み会と変わらないんだよな、多分、これ。割と飲み会ではある。これで酒出たら飲み会だよ。定期的に集まって、最初はちょっとしゃべって、その後、映画見て、映画見ながらしゃべって解散みたいな。マジでこれ飲み会チックじゃありません？一次会でしゃべりながら飯食って、二次会でカラオケとかやって解散みたいな。

俺は「ただの手帳持ちの集まり」って言ってます。月1で雑に集まってる手帳持ちの集まりって言ってます。周りに障害者手帳を持ってる人が複数いるので、それが早い。言うて、手帳持ちって言ってもそこら辺の人間とあんま変わらないっすよ。

一同好会に参加するとき大切にしていることは？

周りの話を聴くようにはしています。Dさんは、好きなものが合うんでね。「最近どうよ？」っていうのを聞くようにはしてますね。そのネタについて知らない人にゼロから説明するのは割と難しくて。

気遣いは0。だけど、マジで仲いい人だと普通にことばを選ばないんですよ。参加した頃と割と変わってないですよ。

Aさんの就活の話(後述の就職サバイバル)では、俺の知っている情報を全部ぶんどってるだけといえただけ。この前、話題になった就職前に実習が必要な会社だと、(Aさんは)アルバイトしているっていう今の状況とかもあって難しいと思うんです。どんぐりの動きができて、どのくらいコミュニケーションできるかとかを、実習の2週間っていう短期間ですけど、ある程度把握したいっばくて。Aさん的には、就活する期間を長めに、半年とか1年とかつuckedほうが俺はいいと思ったりなんかする。就活については俺的にはマジで「訓練学校行きな」くらいしかなくて。それが一番早いんです。ルート的に。

一将来に関する出来事

以前、通っていたドラム教室は、他の娯楽を優先したくてやめたから、休みの予定がマジで同好会1つになっちゃって。なんで、これがなくなった瞬間、マジで土日、何もなくなるんですよ。これと歯医者ぐらいしかないので。仕事して、休日寝て起きて、ここ来たみたいな、そんな感じなんで、ガチで何もない。近況報告もくそもない(笑)。マジで近況報告と対になるやつ、Cさんの最近見たやつ(ホワイトボードに書いて話す)、あれを定期的に全員でやる？

c. E さんの場合

一同好会はあなたにとってどんな機会や場所？

いろんな人の話聞ける、そこじゃないっすか、やっぱり。例えば仕事場でアニメ好きな人がいて、僕もそれ見ましたよみたいな、話がそこでまた盛り上がるじゃないっすか。そうやって人脈がどんどん広がってくみたい。人と人とのコミュニケーションを広める場かなと思います。結局のところ、人を多く知れるっていうのが一番面白いところじゃないっすかね。その人が何を考えててとか、こういうものも好きなんじゃないのかなって思ったりとか。

僕は正直ここに来た時が一番戸惑いました。TCG (Trading Card Game)をやってるんだけど、ちょっと場所変えてみない？って (B さんに) 言われて。カードの用意して行ったんっすよ。TCG やらずにいきなり円陣組み始めるじゃないっすか。もうこの時点で分かんないっす、僕は。それでも次も来たのは、人間性ですよ。続けてもいいなって思っ。その人に何か心打たれたものがあつたから来てる。面白い人たちがいるなって思ったのと、多分この会ってというのはそもそも参加できること自体奇跡だなんて思ったんで。自分で開こうと思つたらまず難しいし。他の会でこういうことやってるって全く思い付かなかつたんで。奇跡的な機会だしやってみようって思っ。来。僕はメリットがあると思っ。この会自体が。

リーダーがいない。リーダー不在のまま会が進んでます。

一同好会に参加するとき大切にしていることは？

基本聴く側ですかね。聴く側が多分めちゃくちゃいいなって思っ。じゃないと、多分この会自体成り立たなくなるんで。だって、ただでさえ決めてないんですもん、目的を。みんなに任せるねって形にしている以上、みんなが別々の方向行つたら、もう崩壊するに決まってるんっすよ、当たり前ながら。だから、あんま決め事には参加しないふうにしています。任せるほうがいいと思っ。目的を定めないからこそその懸念点がこれです。

僕は基本的に否定から入るの嫌いなんです。絶対聞いた側、嫌な気持ちになるって分かるんで。そう思うようになったのは小学校の頃からです。多分こう言つたら昔の俺と重ねて孤立するんだろうなって思っ。じゃあ、そうしない手を取ろうっていう。昔の教訓から、今僕はこれでいっ。別に人って、1 人になつても生きていけるんっすよ、全然。けど、やっぱりしこりが残るじゃないっすか。他のメンバーの話を聴いていて、(このままだとそのメンバーが) 結果的に孤立するなって思ったりして。別に人っていうのは孤立して

も生きていけるんっす。お金と住所とかあれば、孤立してもなんだかん生きていけはいけるんで。ただ、肩身が狭いし、精神的にはストレスがたまりやすくなるし。そういうのはけ口があるのがやっぱ大事なので。結局人間関係ってのは、そういうのにつながってくるんで。生きていけないわけじゃないけど、ただ辛いよって (思っ。ことばをかけている)。

一将来に関する出来事

転職しました。会社替わりしました。結構耐え忍んだけど、やっぱきつかったっすから。メンタル面病んだことなかったのに、初めてメンタルでつれえと思つたから。結構、理不尽に怒られてたんで、ぐっところえるの辛かつたっす。自分でやらかして自分で挽回できるミスならいいんっすけど。聞いても教えてもらえなくて、やってみてと言われるだけで。それで、うまくいかない、どれだけの損害が出ると思っ。おまえ払えんのか！って言われても。転職する時は、ハローワーク行っ。前の会社はなかなか辞められなかつたっす。だから、今の会社に待ってもらつた形です。うまく調整してもらいました。ほんと申し訳ないと思っ。

最初の会社の就職は、専門学校で、教室にでかい本が置いてあつて、そのでかい本に採用情報が載ってるんっすよ。そん中から探しました。学校では、履歴書の書き方とか教えてくれるんですけど、結局そこで終わりです。もっとサポートしてもらえるやつもいるんですけど、僕はなぜかなかつたっす。そう、今までも自分でやってきました。

そもそも (B さんから) 手帳持ちっ。聞いて、何それ？って最初なりました。僕持っないのにこの会行っいいのかなってちょっと思っ。いました。僕も欲しいって思つたもん、最初聞いた時。それ就職にめっちゃ役に立つの？って、めっちゃくちゃ興味湧いたんっすけど。僕にはちょっと手が届かないものとして、うらやましいなって。僕はキラキラって、いいなと思っ。見てたんっすよ。B が手帳取り出すたび、いいなあつて。

(2)就活サバイバル：

対話を続けながら未来に向かって生き抜く (フィールドノーツ、LINE より)

2023 年 11 月 12 日、2 回目の推し紹介の後、A さんが、私と E さんの近くまでフラリと歩いてきた。壁にもたれた姿勢からそのまましゃがみ込んで床に座り、就活のことを話し始める。B さんから紹介された会社から不採用の連絡がきたと言う。すでにグループ LINE で不採用の連絡が来たこと知つていたので、すんなり話は始まった。B さんが「うちの部署は人が足りないからいけると思つただけどな」と呟く。それを聞いて A さん

が、気にしていたことを打ち明けるように「実は、研修に来れるかって電話があったんだけど、もうバイトのシフトが出た後で、その日は行けなかったんだよね。それ、行っておいた方がよかったのかな」と尋ねる。Bさんが「ああ、仕事に向いているか確認するやつだな」と答える。Bさんのことを聞いたAさんは落ち着かなくなっていて、「そうなのか。行けばよかった。はあそうなんだ。」と何度も繰り返した。Bさんは「この仕事できるかってことを見たいんだよ。俺らみたいな手帳持ちの場合。俺も2週間くらい研修は受けたからなあ。Dも受けたよね?」と、少し離れた所にいたDさんに話をふり、Dさんは何度かうなづいた。Aさんは、同じく手帳を持つCさんにも「Cは?」と尋ねた。声をかけられたCさんは、「えっ?」と動画から顔をあげ、少し考えてから首を振って「行ってない」と答えた。そうしたやりとりを聞いていたAさんは「やっぱり行けばよかった」と悔しそうに言い、「その前日に、バイトの主任とシフトのことでもめたんだよね。」とバイトを調整しづらい状況だったことを話した。何度も悔しそうに「なんだよ・・・なんだよ・・・」と繰り返す。私が、「この日、来られますか?」って聞かれたの?」と尋ねると、Aさんは、「研修があるけど来られますか?」って聞かれて、シフトのこと言ったら、研修には参加しないってことですね、って言われた。」と答え、「それ、電話なんかで言うことじゃないじゃん!」と声を荒立て、そして一気に「俺だって頑張ってるじゃん! バイトして奨学金返して頑張ってるじゃん! 向こうの日程で研修に参加できる人が有利なら、何もしてない人の方が得じゃない!?」と気持ちを吐き出すように言った。それをうなづきながら聞いていたEさんが、静かな声で「それはなんとも言えない。向こうはこっちに何も予定がないと思ったのかもしれないし。何もない人が大半なのかもしれないから」と話した。Aさんはそれをうなづきながら聞き、そして「日程のこと相談すればよかったかも」と呟いた。それを聞いたEさんが「確かに。その日は行けないけど、別の日なら行けますはアリだったんじゃない?」と言う。Aさんは、それを聞きながら頭を抱えるように体を丸めて「そうかあ、もう」と悔しそうに言った。そして、ことを詰まらせながら「こういう言い方は良くないけど、俺より重い障害がある人が受かって、俺はダメだってなると、俺ってそんなにダメなのかって思う」と泣きそうな悲しい声で話した。それを聞いて、Bさん、Eさん、私が、すかさず「それはない」と声を揃えて言った。Eさんは、うなづきながら少し間をおいて、「今回のことはもうしょうがないから、次に生かしていくしかない

よ・・・だから今日は楽しもう」と静かな声で言った。Aさんは、相変わらず辛そうな声で、「いつもはあんまり考えないようにしてるけど、考え始めると気持ちが乱れる。それが辛い。ここですか、こういうこと言えるところないから。もう就活したくない。気持ちがこう掻き乱されるのが嫌なんだよ。辛い。穏やかでいたい。」と話した。Eさんは、うんうんとうなづきながら聴いた後、「でも一歩は進めないと。立ち止まっちゃダメだ!」とアニメのセリフを空元氣を使って言って、「何かはしていないと」と静かに付け加えた。その後、もう募集は出ないのかとか、なんで働かなきゃいけないんだろ、などと話していると少しずつ空気が和らいで、みんなの声も明るくなっていった。Aさんは近々、親とハローワークに行く予定だと話し、Bさんは「どこのハロー? 担当者さんにつないでもらった方がいい。同じ人の方がいい。」と伝えていた。

このやりとりの間、CさんとDさんはほとんどことを挟まず、CさんはいつものようにiPadで動画を見ていた。Aさんの就活の話が終わり、ボードゲームをやるようになった時、CさんがiPadから顔を上げて、「残り時間が少ないから何をやる?」と言った。Aさんはそのことばに「俺が時間取っちゃったから。ごめん。」と素直に謝り、Cさんは「それは全然いいよ。」とサラリと答え、普段通りゲームが始まった。Aさんにも笑顔が戻り、ゲームを楽しんでいるようだった。

Aさんはその後も就職活動を続けた。そして2024年7月8日、書類選考に通り、そして2024年7月14日、採用されたことを伝えるLINEが届いた。「採用らしいです」と喜びを表すスタンプを添えて送られたメッセージには、「ようこそ・・・社畜の世界へ」と冗談っぽく社会人という仲間になったことを祝うメッセージや、「おめでとうございます。That's one small step for man, one giant leap for mankind.」と有名なことばを添えて、これまでのAさんの努力とこの一歩が将来につながっていくことを伝えるメッセージが書き込まれていった。こうしてAさんの就活サバイバルは終わった。

7. 考察：ナラティブ・コミュニティとしての同好会

ここでは対話がつくる居場所の特性と自分らしい将来について、ナラティブ・コミュニティの視点から考察する。ナラティブとは、誰かに向かって何かを語ることである「語り」と、出来事や思いをつなぎ合わせて何らかの結末へと向かうお話である「物語」という二つの意味が含まれることばである(野口, 2002)。「語り」と「物語」は相互的かつ連

続的な関係にあり、その関係を一言で表すことばがナラティブである(野口, 2002)。誰かに向けて語るとき、そこには対話がうまれ、対話に参加する相手との相互作用の中で、出来事には多様な物語が生じる。そして、ナラティブ・コミュニティとは、新しい語りや物語が共有され定着する空間である(野口, 2002)。

7.1 「楽しさ」による対話への参加と自主性

同好会は、メンバーにとって、全員で楽しみを共有する居場所であった。では、メンバーが重要視する“全員で楽しむこと”には、どのような意義があるのだろうか。

同好会には、近況や関心事を話題とした話し合い、そして余暇活動を通したおしゃべりがあり、ことばによるやりとりだけではない様々なスタイルの対話がある。“楽しさ”は、同好会にある様々な対話に参加するための招待状であると考ええる。“楽しい”という気持ちは、参加者が、相互作用に生じる意味を追っていくこと、つまり対話という円環的な相互作用の一部になることを助ける。“楽しい”という気持ちによって、そこにいる全員が対話の参加者になり、対話に参加し続けるエネルギーを得ている。そして、全員が対話に参加することで“一緒に楽しむ”という経験が共有される。楽しさを共有したという充実感が、対話によって共同制作されるのである。対話に参加しているという感覚は、帰属意識と当事者意識をもたらし、共同責任につながる(Anderson, 2012)。楽しさをきっかけに対話の参加者となることで、楽しい時間を共に過ごしたという仲間意識が生まれ、同好会は、誰かのものではなく、自分たちのものだという想いが育まれる。これにより同好会は、主体的・自主的に運営されていくと考える。

7.2 「語りの共同体」と「物語の共同体」

ナラティブ・コミュニティは、「語りの共同体」と「物語の共同体」の両側面を持つ(野口, 2002)。以下に、「語りの共同体」と「物語の共同体」の視点から考察する。

7.2.1 「語りの共同体」

同好会には、「語りの共同体」としての特徴がある。「語りの共同体」には、新しい物語を生み出す面と、語りによって維持される面があるとされる(野口, 2002)。

なぜ、同好会では新しい物語が生まれるのか。同好会は、問題・課題の解決、何かしらの決定を目的としておらず、“対話が続くこと”のみが活動の目的である。“対話が続くこと”を活動の目的とすることが、表2に提示した多様な参加目的を許容する柔軟な運営方法を創り、また話す話題や対話への参加の

仕方の自由さを保証している。加えてメンバーが、相手の話を理解しようと関心を寄せ、否定から入らないという姿勢を心がけていることにより、何を話しても受け入れられるという信頼感と相手の語りへの敬意が生じる。コラボレイティブな関係性をつくる要素には、信頼と敬意があるとされ(Anderson, 2012)、同好会の対話には、この信頼と敬意がある。“対話が続くこと”を活動の目的とすることで、運営の柔軟さ、対話の自由、コラボレイティブな関係が生まれ、その空間で、メンバーは自分の考えを自由に語り、一人では出会うことができなかった新しい物語に出会っていく。新しい物語に出会うからこそ、表2に参加のメリットとして提示した、エネルギーをもらえる・気分が軽くなる、関心や考え方を広げる機会になる、相談し経験を踏まえたアドバイスを得られる、といった経験が語られたと考える。

また同好会には、語られた物語を聴く多数の聴衆も存在する。聴衆により、新しい物語は、より確かな位置を占める(野口, 2002)とされるように、メンバーが聴衆となることで、新しい物語は共有され、定着していく。

「語りの共同体」は、新しい物語を生み出すことで維持され、維持するためには一人一人の語りが不可欠である(野口, 2002)。同好会は、まさに、生き活きとした対話、そこからうまれる新しい物語によって維持される共同体であり、同好会は、対話への期待と対話の尊重によって継続している。

7.2.2 「物語の共同体」

ナラティブ・コミュニティでは、共有される独自の物語があり、この独自の物語が参加者の個別の物語に緩やかな共同性を与えるとされる(野口, 2002)。では、同好会には、どのような独自の物語があるのだろうか。同好会にある独自の物語は、“サバイバルを生き抜く”という物語である。就活サバイバルの対話では、Aさんは辛く苦しい心境を語り、メンバーはそれを理解しようと努め、それぞれのやり方でことばを重ねている。その対話の中で、“もう一歩も進めない”という絶望的な物語は、“なんとか一歩前に踏み出してみよう”、という新しい物語に書き換えられている。思春期・青年期の若者が出会う困難は、まさにサバイバルである。メンバー一人一人は、自分ではどうすることもできなかった経験、努力だけでは乗り越えられなかった経験を持つ。そうした経験は、将来や未来への諦め、自分自身の軽視、生きにくさにつながることもある。同好会には、“サバイバルを生き抜く”という共同性をもつ物語があり、この物語は、自分自身や将来についての新しい物語を包含している。“サバイバルを生き抜く”という物語は、良いか悪いか、アリかナシか、といった“どちらか”という考え方ではなく、そういう

考え方もあるが、こういう考え方もある、どちらもアリ、といった“どちらも”という考え方を促す。

“どちらも”という考え方は、自分自身への理解を多様にし、将来への様々な期待を生む。同好会は、サバイバルを生き抜き、自分らしい未来を探すという物語によってつながる共同体である。そして、この物語は、自分自身の理解や社会に踏み出すことを支えている。

「物語の共同体」には、共同性をあたえる物語の他に、グループの来歴と存在意義を明らかにする物語があるとされる(野口, 2002)。ADを取り入れた対話のセッションでは、「みんなで集まって一緒に活動する」という同好会の来歴と、「みんなにとって意味のある活動である」という同好会の存在意義、その狭間に生じた葛藤の物語が共有されていた。そして、来歴の物語に捉われすぎず、変化の余地を残した新しい物語が創られていった。対話のセッションは、来歴の物語を更新して書き換え、活動意義の物語を再確認する機会になったと考える。

7.3 結果として生じるナラティブ・コミュニティ

では、新たにナラティブ・コミュニティとなるグループを立ち上げるとするならば、どうすれば良いのだろうか。ナラティブ・コミュニティは、研究者や発起人によって創られるものではなく、相互作用によって創り出される。それゆえに、相互作用における姿勢が重要となる。同好会において私が心掛けた姿勢は、どうあれば同好会が対話的であるか、つまりフラットで、透明で、民主的であるのか、を探索し続けることであった。また、結果 6.1 の(3)メンバーが語る同好会が続く理由と同好会の今後、に提示したように、対話を重視する以上、“話したいと思う相手”が集まり、対話の参加を助ける“楽しさを共有する”機会をつくり、“対話が続くこと”を意識を向けることが重要である。誰をメンバーとして招集し、何を楽しむのか、対話が続くためにどのような姿勢を持ち寄るか、それはメンバーの相互作用が決めていく。対話がそうであるように、グループのあり様は常に流動的だという不確かさをメンバーが受け入れながら、グループの有り様を創っていく、という方法が妥当であると考えられる。

謝辞

本研究に参加し、対話的な姿勢でことばを重ね合った同好会メンバーに心から感謝いたします。この研究は、第 38 回(2022 年度)公益財団法人マツダ財団助成金—青少年健全育成関係—の助成を受けて実施しました。同好会において毎回生まれていく対話の内実と一人一人の経験を研究としてまとめ、その後の活動の充実につながる機会をくださったことに感謝いたします。

学会発表

山本真実 (2024) : 若者がつくる居場所としてのグループ活動の特性: 楽しみと対話による主体性と継続性, 第 83 回日本公衆衛生学会総会, ポスター発表。

山本真実 (2024) : 地域における若者グループ活動から考える若者の居場所づくり: 文献レビューからの検討, 第 12 回日本公衆衛生看護学会学術集会, ポスター発表。

Mami Yamamoto (2025): Management Attitude to Continue Young People's Independent Group Activities: Proposals from Dialogue Sessions including Anticipation Dialogue, 15th International Nursing Conference & 28th East Asian Forum of Nursing Scholars, Poster session.

参考文献

- Anderson, H. (2012): コラボレイティブ・アプローチの可能性. Malinen, T., Cooper, J. S., F. Thomas, N. F. 編/小森康永, 奥野光, 谷原隆行 訳 (2015) : 会話・協働・ナラティブ アンデルセン・アンダーソン・ホワイトのワークショップ, pp.115-145, 金剛出版, 東京.
- Anderson, H., Goolishian, H. (1992): クライエントこそ専門家である—セラピーにおける無知のアプローチ. McNamee, S. & Gergen, J. K. 編/野口裕二, 野村直樹 訳 (1997) : ナラティブ・セラピー 社会構成主義の実践, pp.59-88, 金剛出版, 東京.
- Anderson, H., Goolishian, H., 野村直樹 (2013) : 協働するナラティブ グーリションとアンダーソンによる論文「言語システムとしてのヒューマンシステム」, 遠見書房, 東京.
- Gray, R. J., Grove, K. S. (2021)/黒田裕子, 逸見功, 佐藤富美子 訳 (2023) : パーソナル・グローブ 看護研究入門 原著第 9 版, pp.278-284, ELSEVIER, 東京.
- Hoffman, L. (1992): 家族療法のための再帰的視点. McNamee, S. & Gergen, J. K. 編/野口裕二, 野村直樹 訳 (1997) : ナラティブ・セラピー 社会構成主義の実践, pp.23-57, 金剛出版, 東京.
- 野口裕二 (2002) : 物語としてのケア・ナラティブ・アプローチの世界へ, pp.20-22, pp.164-181, 医学書院, 東京.
- Roper, M. J. & Shapira J. (2000)/麻原清美, グレグ美鈴 (2003) : エスノグラフィ, pp.107-113, 日本看護協会出版会, 東京.
- 佐藤郁哉 (2008) : 質的データ分析法 原理・方法・実践, pp.111-127, 新曜社, 東京.
- Seikkula, J. & Arnkil, E. T. (2006)/高木俊介, 岡田愛 訳 (2016) : オーブンダイアログ, pp.71-97.